

富田林市埋蔵文化財調査報告11

嶽山山頂遺跡発掘調査報告書

1983.12～1984.3 調査

1985.2

富田林市教育委員会



藏骨器出土状况



窑跡全景

はじめに

富田林市は、大阪府の南東部に位置し、市内の中心を石川が清流を保ちながら北流する、豊かな美しい自然に恵まれた教育・文化都市です。

石川によって形成された良好な河岸段丘上には、古代から脈々と続く先人の足跡がきざまれており、80ヶ所を越える多くの遺跡が分布しております。

市内の南部には、ひときわ高くそびえる嶽山があり、山頂からは、金剛・生駒山脈を東に眺望でき、北は大阪湾から西は泉州沖まで一望することができます。嶽山一帯は、また、歴史的な舞台となったところでもあります。南北朝時代には、南朝方の軍事的要所として、嶽山城が築かれ、古く蘇我馬子が推古天皇の勅命をうけて創建したと伝えられる河内龍泉寺が、山腹にその姿をとどめています。

さて、このたび景勝を誇る嶽山山頂に、郵政省の簡易保険保養センターが建設される運びとなり、工事に先立ち発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、绳文時代から中世に至る遺物が出土し、山頂一帯が平安時代には火葬墓を伴う墓域であったことが判明するとともに、窯業が営まれていたことが確認されました。

なお最後になりましたが、このたびの発掘調査に対し深い理解とご協力を賜わりました簡易保険郵便福祉年金事業団、並びに種々のご指導をいただきました神戸商船大学教授・北野耕平先生、大谷女子大学助教授・中村浩先生をはじめ、大阪府教育委員会文化財保護課、その他関係者の皆さん、また、地元のかたがたのご協力に対し、深く感謝の意を表しますとともに、今後とも変わらぬお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

昭和60年2月

富田林市教育委員会
教育長 福田治平

例　　言

1. 本書は、富田林市（市長 内田次郎）が、簡易保険郵便年金福祉事業団（理事長 浅尾宏）から委託された富田林市簡易保険保養センター（仮称）建設に伴う嶽山山頂遺跡の埋蔵文化財発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課 中辻亘を担当者とし、昭和58年12月1日から現地調査を開始し、昭和59年3月31日に終了した。
3. 調査の実施及び本書の作成にあたり、下記の諸氏から格別の助言や援助を受けた。ここに記して感謝の意を表します。
北野耕平（神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員）、中村浩（大谷女子大学助教授）、富賀肇（藤井寺高等学校教諭）、井藤徹（大阪府教育委員会文化財保護課主幹）、泉本知秀（財団法人大阪文化財センター業務課長）、玉井功・小林義孝（大阪府教育委員会文化財保護課技師）、掘江門也（大阪府教育委員会文化財保護課記念物第1係長）、竹谷俊夫（天理大学附属天理参考館学芸員）、笠井敏夫（羽曳野市教育委員会）、上田睦（藤井寺市教育委員会）、（株）小西設計
4. 本書の執筆は、遺物については田川友美、遺構については岡本武司・中辻亘が行った。
5. 考古地磁気測定を、富山大学教授 広岡公夫氏にお願いし、本書に測定結果を記載した。
6. 本書の編集は岡本・中辻が行った。製図については、遺物を忍薰氏、遺構を岡本武司が行った。

調　　査　参　加　者

白江和弘・高橋修美・古東幸宏・大石 聰・岡本武司・杉山泰敏・村井正幸
浅野 隆・池田雅俊・内田 真・打田雅彦・大橋圭子・大邊 明・田川友美
本並後哉・本並宏介・奥田正己・北野 异・仲井精一・嵐山秀夫・端山誠一
平井陽一・松本晃尚・岡嶋智美・金田安史・仲井和代・福田恵子・山田道司
沼間章作・信田佳寛・森 優裕

本文目次

はじめに

例　言

例　言	1
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	3
III 調査の成果	6
(1) 概観	6
(2) 造構	6
IV 出土遺物	12
V まとめ	17
付 猿山山頂遺跡の考古地磁気法による年代推定	18

挿図目次

挿図1 試掘時の出土遺物	1
挿図2 調査区とその周辺	5
挿図3 土壙1平面図・断面図	6
挿図4 土壙2平面図・断面図	7
挿図5 上壙3平面図・断面図	7
挿図6 土壙4平面図・断面図	8
挿図7 火葬墓平面図・断面図	9
挿図8 窯跡平面図・断面図	11
挿図9 土壙24出土遺物	12
挿図10 火葬墓出土遺物	13
挿図11 窯跡出土遺物	13
挿図12 地山直上出土遺物	14
挿図13 第2層出土遺物	15
挿図14 過去2000年間の西南日本における地磁気永年変化（広岡，1977）	

と猿山山頂遺跡の考古地磁気測定結果

表目次

表1 検出遺構一覧	10
表2 II区窯跡の磁化測定結果	20
表3 I区1号窯跡の磁化測定結果	20
表4 猿山山頂遺跡の考古地磁気測定結果	21

図版目次

- 図版1 上 調査区遠景航空写真 南から
下 調査区遠景航空写真 西から
- 図版2 嵐山周辺航空写真
- 図版3 調査区全景航空写真
- 図版4 上 調査区近景 南から
下 調査区北半部近景 南から
- 図版5 上 調査区西半部近景 東から
下 調査区東半部近景 北西から
- 図版6 上 調査区南半部近景 北から
下 調査区からの赤阪城跡遠景
- 図版7 上 土壌1半掘状況 北から
下 土壌1完掘状況 北から
- 図版8 上 土壌2半掘状況 南から
下 土壌2完掘状況 南から
- 図版9 上 土壌3半掘状況 南から
下 土壌3完掘状況 南から
- 図版10 上 土壌4半掘状況 南から
下 土壌4完掘状況 南から
- 図版11 上 火葬墓内蔵骨器出土状況(検出時) 南から
下 同 上
- 図版12 上 火葬墓内蔵骨器出土状況(精査後) 南から
下 火葬墓蔵骨器内骨片出土状況 南から
- 図版13 上 火葬墓蔵骨器内埋土除去後 北から
下 火葬墓全景 北から
- 図版14 上 窯跡検出状況 南東から
下 窯跡前庭部瓦器碗出土状況 南東から
- 図版15 上 窯跡前庭部瓦器碗出土状況 南東から
下 窯跡全景(半掘時) 東から
- 図版16 上 窯跡全景(窯体片検出時) 東から
下 窯跡内窯体片出土状況 北から
- 図版17 上 窯跡焚口 東から
下 窯跡横口 東から
- 図版18 上 窯跡全景(完掘時) 西から
下 窯跡全景(完掘時) 東から
- 図版19 上 土壌24石鐵出土状況 北から
下 地山直上石鐵出土状況 南から
- 図版20 火葬墓出土蔵骨器・鉄釘
- 図版21 上 土壌24出土石器, 破片・地山直上
出土石器
下 第3層出土黒色土器, 須恵器, 第
1層出土須恵器, 第2層出土瓦質
土器, 窯跡出土瓦器・地山直上出
出土土師器

I 調査に至る経過

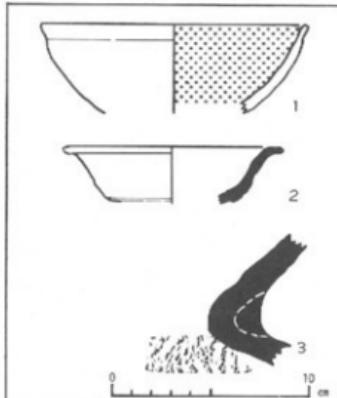
富田林市の南端、標高280mを測る嶽山は、北方に近づ飛鳥・古市古墳群を、東方に金剛・葛城山脈を一望する風光明媚な山である。

こうした立地から、古く南北朝時代には南朝方楠木正成公ゆかりの嶽山城（龍泉寺城）が築かれ軍事上の一拠点として歴史上に名をとどめている。山腹には、さらに古く推古天皇2年（594）の創建と伝えられる名刹龍泉寺があり、国指定名勝の庭園や重要文化財の仁王門を有している。

このような歴史的、環境的にも恵まれた嶽山山頂に、簡易保険郵便年金福祉事業団の保養センター建設が計画され、昭和56年から57年にかけて、嶽山道路建設工事に伴い富田林市教育委員会と嶽山遺跡発掘調査団が事前発掘調査を実施している。調査では、縄文時代石器が出土すると共に、龍泉寺の往時を知る坊院跡が検出されている。

こうした過去の経過を踏まえ、建物本体及び造成工事予定地内において、簡易保険郵便年金福祉事業団の承諾を得て富田林市教育委員会が事前調査を実施することになった。調査は、昭和58年8月21日から10月1日まで（第1次）面積600m²におよぶ10ヶ所のトレンチを設け、実施した。調査の結果、灰白色風化疊層の地山面に部分的ではあるが、黄褐色粘質土が認められたため掘り下げたところ、堀状の落ち込みとなった。また、地山上にはビット及び土壤が検出された。しかしながら、堀状の落ち込みがトレンチ調査のために面的広がりの中で確認する必要が生じたので、昭和58年10月7日から10月18日にかけて第2次調査を実施し、面積を2,500m²と拡張した。結果として、堀状落ち込みは不連続のものとなり、地質面からの精査では、以下のようになつた。

1. 堀状落ち込みの底は、新しい風化層を切り破いた形跡が認められない。
2. 細石が粒揃いで認められる。
3. 断面には脈状のものが風化した岩盤面から上層までつながっており、温泉等によるシミと判断される。
4. 黄褐色及び赤褐色粘質土は、風化が顕著であった結果、粘土化したものと思われ、嶽山の火山岩と大阪層群との不整合面によって形成されたもので、



插図1 試掘時の出土遺物

人工的な堆積土でなく自然現象による堆積と判断される。

以上の総合的な見知から、櫛山城（龍泉寺城）の関連遺構ではないことが判明した。一方、面積を拡張したことにより、炭及び灰を含むビット及び方形の土壤が更に検出され、表層中からは、土師器・須恵器・黒色土器等が出土した。



第2 トレンチ堀状落ち込み 北西から



4 A区地山直上土師器
出土状況 南から

II 位置と環境

嶽山山頂遺跡は大阪府富田林市龍泉に位置する。遺跡は市内南東部にそびえる標高 280 m を測る嶽山の山頂にあって、東は萬城・金剛山脈、西は石川を眼下に遠く泉州丘陵から泉州まで一望できる。また、北は古市古墳群をはじめ大阪平野から神戸湾岸まで眺望が可能である。

嶽山東方には佐備川が北流し、両岸には 200~300 m の幅をもつ平坦面が形成されている。この佐備川流域には縄文時代から鎌倉時代に至る遺物の散布が認められる。なかでも龍泉所在の佐備川遺跡からは縄文時代の石鏃が出土している。^(注2) 同時代の遺跡には嶽山西方の錦織に所在する錦織遺跡及び錦織南遺跡がある。両遺跡の立地も前者同様に市内の中心を北流する石川によって形成された河岸段丘面に位置している。^(注3) 錦織遺跡からは縄文時代前期（北白川下層式）、^(注4) 錦織南遺跡からは縄文時代晚期（龜ヶ岡式）の土器が出土している。

弥生時代の遺跡に目を向けると、錦織遺跡北方約 700 m の石川西岸には弥生時代中期の甲田南遺跡がある。^(注5) また、嶽山北方の標高約 100 m の丘陵上には弥生時代後期の彼方遺跡があり、^(注6) 同時期の高地性集落の特徴がみられる。

古墳時代になると、石川両岸の平地を一望する位置に多くの古墳が営まれる。前期の古墳の多くは、石川を東方に見下ろす羽曳野丘陵上に位置している。嶽山の西斜面には横穴式石室と^(注7) いう後期古墳の特徴をもつ古墳群がある。田中古墳群は 5 基からなる徑 25 m 前後の円墳で形成されている。またすぐ南に、距離を近くして、23 基の徑約 10 m、高さ 2~3 m の規模をもつ円墳群が群集する嶽山古墳群がある。^(注8) 嶽山の西麓の石川東岸の平地には横穴式石室をもつと思われる西野々古墳群が認められる。

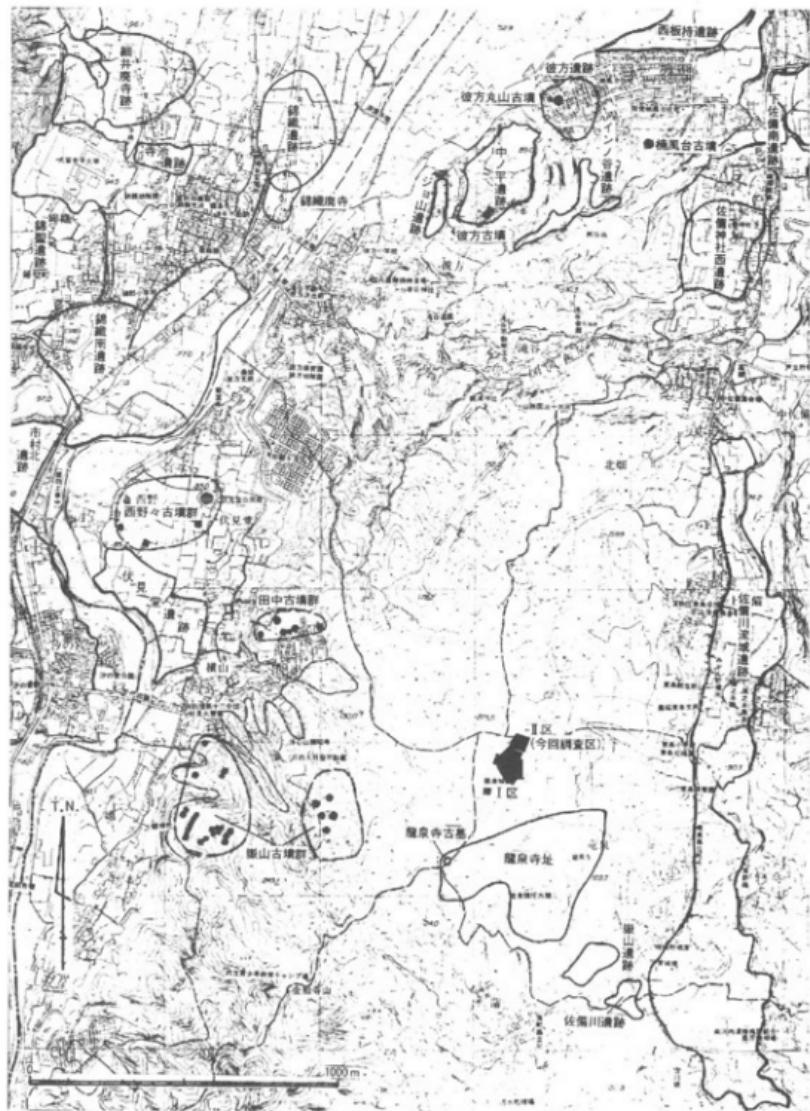
嶽山の東斜面中腹には推古 2 年（594）の創建と伝えられる龍泉寺が位置している。同寺からは白鳳時代の屋根瓦である複弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、大和飛鳥の川原寺式に比定できる。^(注9) 龍泉寺出土軒丸瓦が、石川西岸の錦織に所在する細井庵寺でも出土している。^(注10) 両寺出土軒丸瓦には胎土・焼成の点に一致する点が認められる。また、飛鳥時代寺院址として^(注11) 著名な新堂庵寺でも同型式の瓦が再建時に使用されている。^(注12) 新堂庵寺の創建時の平瓦は、同庵寺北西方、標高 98 m の羽曳野丘陵東端に位置する終末期古墳として有名なお龜石古墳の横口式家形石棺の周囲に石梯状に積み上げられており、古代寺院と古墳との関連性を知りうる典型的な例として貴重である。更に、このような例は、細井庵寺と羽曳野丘陵上から東方に同庵寺を見下ろす南坪池古墳にも認められ、寺院建築の基礎に使用された埴輪が共通出土する点が特徴である。

嶽山周辺は、また、南北朝時代には歴史の舞台となり、南朝方の楠木正成の山城である、龍泉

(注1)

寺城が山頂付近にあったといわれており、原始・古代から現代までの人々の足跡をうかがい知
ることができる。

- (注1) 富田林市教育委員会『富田林市の埋蔵文化財』(1978年)
- (注2) 北野耕平「鎌縫繩文遺跡について」(『古代学研究』第5号、1961年)
- (注3) 山本謙「鷲轍南遺跡」大阪府教育委員会(1981年)
- (注4) 大阪府教育委員会『大阪府文化財調査概要』(1984年)
- (注5) 玉井功「富田林市波方所在 彼方遺跡試掘調査報告」(大阪府文化財調査速報『諦・香・仙』第35号、1982年)
- (注6) 腹部明生「田中山古墳群」(『大阪市立博物館』No.3、1964年)
安井良三「横穴式石室の内部施設に関する一考察」(『先史学研究』第5号、1965年)
森浩一「古墳の発掘」(中公新書、1965年)
- (注7) 北野耕平「考古学より見た富田林」(『富田林市誌』、1955年)
野上丈助「河内の古墳」(1968年)
関西大学文学部考古学研究室「大師山」(1977年)
- (注8) 北野耕平『富田林市史』第4巻(1972年)
- (財) 大阪文化財センター『明八塚周辺部試掘調査報告書』(1974年)
- (注9) 嶽山遺跡発掘調査団『嶽山遺跡発掘調査報告書』(1981年)
大谷女子大学資料館『龍泉寺』(1981年)
大谷女子大学資料館『龍泉寺Ⅱ』(1982年)
- (注10) 大阪府教育委員会文化財保護課 小林義寿氏から有益な助言を得た
- (注11) 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」(1936年)
大阪大学国史研究室「河内新堂廃寺」(1960年)
大阪府教育委員会「河内新堂・鳥合寺跡の調査」(1961年)
- (注12) 奈良国立博物館『飛鳥白源の古瓦』(1982年)
- (注13) 高橋健自「河内に於ける一種の古道」(『考古学雑誌』第4巻第4号、1913年)
梅原末治「お龜石・石室殿と鬼頭・鬼劍」(『歴史地理』第23巻第5号、1914年)
梅原末治「大阪府下に於ける主要な古墳墓」其2 (『大阪府報第5輯』図版、1934年)
堀田啓一「西日本における横口式石棺の古墳について」(『先史学研究』第5号、1965年)
門脇慎二「飛鳥その古代史と風土」(NHKブックス、1970年)
小林行雄「古墳時代の研究」(1970年)
朝日新聞社『飛鳥風』図録(1973年)
猪熊兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」(『研究論集Ⅲ・奈良国立文化財研究所学報』第28号、1976年)
飛鳥資料館『飛鳥時代の古墳』飛鳥資料叢書第6号(1979年)
- 白石太一郎「畿内における古墳の終末」(『國立歴史民族博物館研究報告』第1集、1982年)
- (注14) 新人物往来社『日本城郭大系』第12巻(1981年)
岩波古典文学大系「龍泉寺平事」(『太平記』、1960年)



挿図2 調査区とその周辺

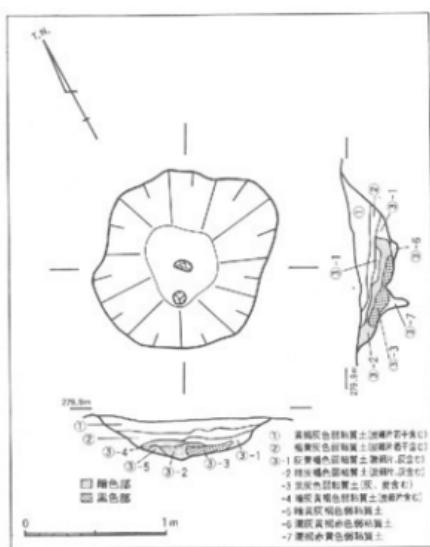
III 調査の成果

(1) 概観

調査区は標高山頂にあって、ミカン園となっており、造成計画予定地約8,500m²を対象に調査を実施した。南北約140m、東西約60mと南北に長い調査区となったため、真北方向を主軸に20m間隔のメッシュを入れ、南北にAからI、東西に1から6として地区設定を行った。

層序は、山頂部では表土（第1層）が約5~10cmの厚さで認められる。斜面地においては、表土下に濁黃褐色弱粘質土（第2層）及び黃褐色弱粘質土（第3層）が裾部に行くにしたがって厚く堆積している。

地山は灰白色風化礫層で、ミカンの植込み穴が無数に掘られていた。検出した遺構は、土壤25・ピット12・火葬墓1・窓跡1であった。遺構の検出密度は比較的薄く、火葬墓が検出された4E区に濃く、土壤及びピットが認められた。



插図3 土壌1 平面図・断面図

(2) 遺構

土壤1

調査区の北端付近4A区で検出した土壤である。深さ41cm、南北長120cm、東西長130cmを測り隅丸方形形状を呈している。埋土は大別して3層からなる。それぞれの厚さは、第1層（黄褐色弱粘質土）約10cm、第2層（褐黃褐色弱粘質土）約5cm、第3層（暗灰黃褐色弱粘質土を主とする）約15cmある。埋土中には炭細片を含んでおり、第3層では灰が混入している。遺物は、各層で土師器片が出土している。細片が主をなすが、器形としては、第3層から杯が出土している。同タイプの土師器は北側地山面でも出土している。

土壤 2

調査区の北部 4 B 区で検出した土壤である。

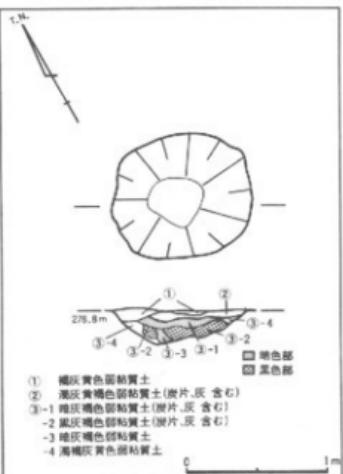
土壤 1 の南南東方向に約 17m の地点に位置する。地形的にはほぼ平坦面にあって、深さ 25cm、南北長 95cm、東西長 89cm を測る。平面形は、土壤 1 と同様に隅丸方形状を呈している。埋土は大別して 3 層からなり、上から順に、褐灰黄色弱粘質土(第 1 層)、濁灰黃褐色弱粘質土(第 2 層)、暗灰褐色弱粘質土(第 3 層)となる。第 1・2 層とも厚さは 5 cm 前後と薄く、第 3 層は 15cm の厚さで堆積している。第 2・3 層には炭細片及び灰が含まれている。特に第 3 層に顕著に認められる。遺物については、まったく認められなかった。

土壤 3

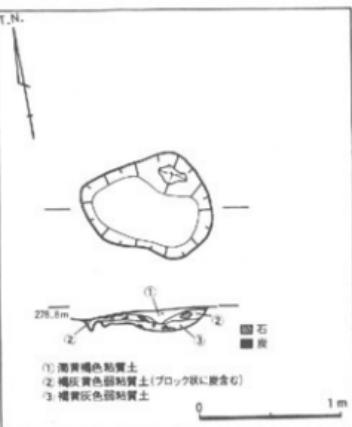
調査区南西部 2 F 区で検出した。平坦面からゆるやかに西に傾斜する斜面上にあり、深さ 17cm、南北長 87cm、東西長 84cm を測る。平面形は隅丸五角形状を呈している。埋土は 3 層に分かれ、上から順に濁灰褐色粘質土(第 1 層)、褐灰黄色弱粘質土(第 2 層)、褐黃灰色弱粘質土(第 3 層)となる。土壤 1・2 のように多量の炭及び灰は含まないものの、第 2 層中にブロック状に炭が認められた。遺物は出土しなかった。

土壤 4

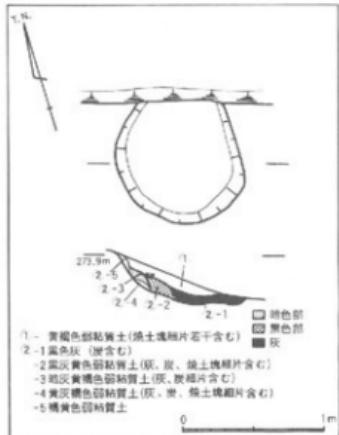
調査区のほぼ中央 4 F 区で検出した。比較的大な東斜面にあって、西方約 7m には窓跡が近接している。北端を第 2 トレンチで切られているため、正確な規模・形状は不明であるが、深さ 38cm、東西長 90cm を測る。平面形は南北に長い楕円形を呈すると思われる。埋土は 2 層に分かれれる。第 1 層中には焼土塊細片が若干認めら



插図 4 土壌 2 平面図・断面図



插図 5 土壌 3 平面図・断面図



挿図6 土壌4 平面図・断面図

掘られていた。藏骨器は、本体に須恵器の鉄鉢を、蓋には皿を逆にして使用しており、外圧によってつぶれた形で出土した。容器内には黄灰色弱粘質土に混じって火葬骨片が認められ、墓壙内からは鉄釘が1点出土した。

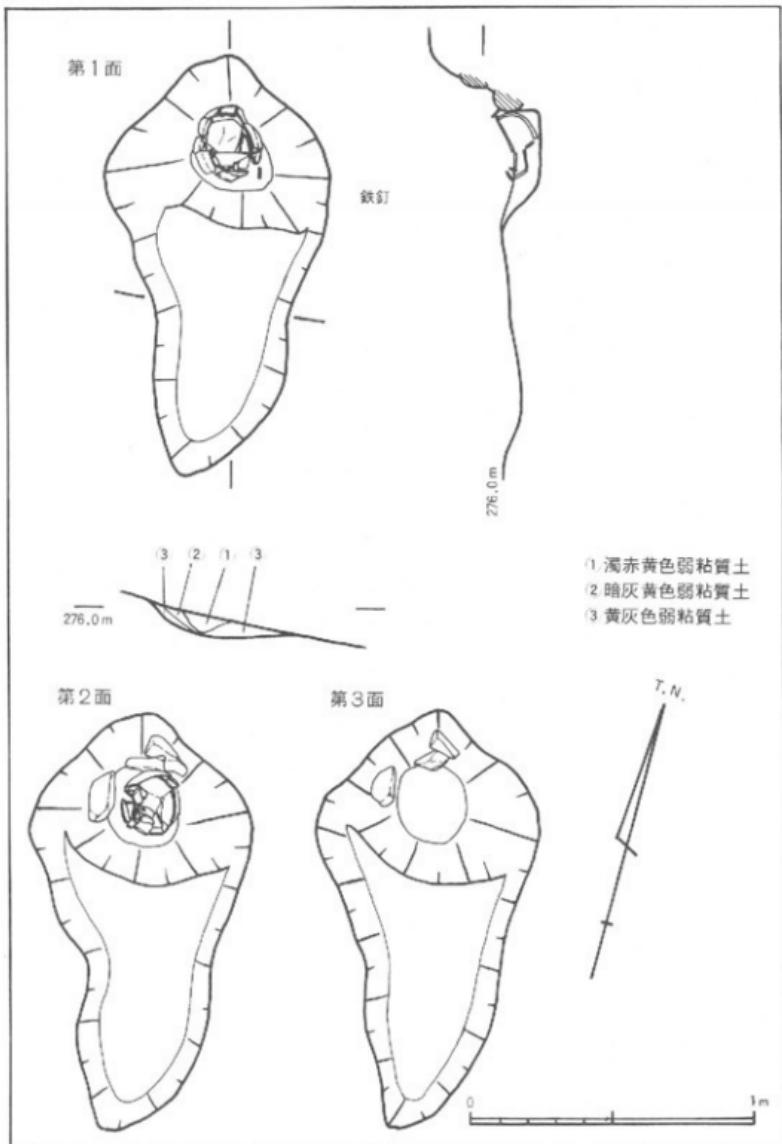
窯跡

調査区南部3F区で検出した。標高275.5mを測る東斜面のほぼ中段に位置している。窯は黄褐色粘質土の地山面に造られている。窯体上の埋土表面では黄灰褐色弱粘質土中に混じって、2m四方にわたり焼土塊が認められた。全体に約30cm掘り下げた時点で、窯壁面が検出できた。窯の形状は卵形をしている。長軸は約170cm、短軸は90cmを測る。主軸は真北から南西約60度北東にふれている。窯体の上半部は削平を受けて半壊したことがわかる。窯体内には、上層では黄褐色弱粘質土が、下層では灰青黄色弱粘質土に混じって窯体片が堆積しており、窯床面は平担で、良く焼けた形跡は認められない。床面西側では炭細片が部分的に残っていた。窯体の北東には高さ20cm、幅40cmの焚口があり、南東には高さ約20cm、幅25cmの横口を有している。窯体の壁面は厚さ約10cmにわたり硬く焼けた形跡が認められる。窯壁の残存高は西側で最高80cm、東側で最高30cmある。壁面の西半部は垂直に立ち上がっているが、東半部は焚口から横口付近にかけて内傾する。焚口及び横口東側には約20度の傾斜をもつ平担面がある。正確な規模は第4トレンチによって削平されているため不明であるが、残存長南北約400cm、東西約100cmを測る。平担面の最下層の炭片を含む淡灰黄色弱粘質土上面から瓦器碗が1点出土している。

れる。第2層は、厚さ10cmあり、焼土塊細片とともに炭及び灰を多量に含んでいる。遺物は出土していない。

火葬墓

調査区中央の第2トレンチ北側4E区で検出した。山頂の平担面から東にゆるやかに傾斜する斜面上段にあって、276mの等高線上に位置している。地山上精査時に焼土塊と炭片が表面に認められたので、黄灰色弱粘質土を北側で約25cm掘り下げたところ、須恵器が出土したため、遺構であることが確認できた。再精査した結果南北長150cm、東西長45~80cmを測る涙形の平面を呈している。南側では深さ7cmと浅く、断面皿状を呈している。北側では、藏骨器を埋納するため、深さ25cm、径60cmを測る円形墓壙が

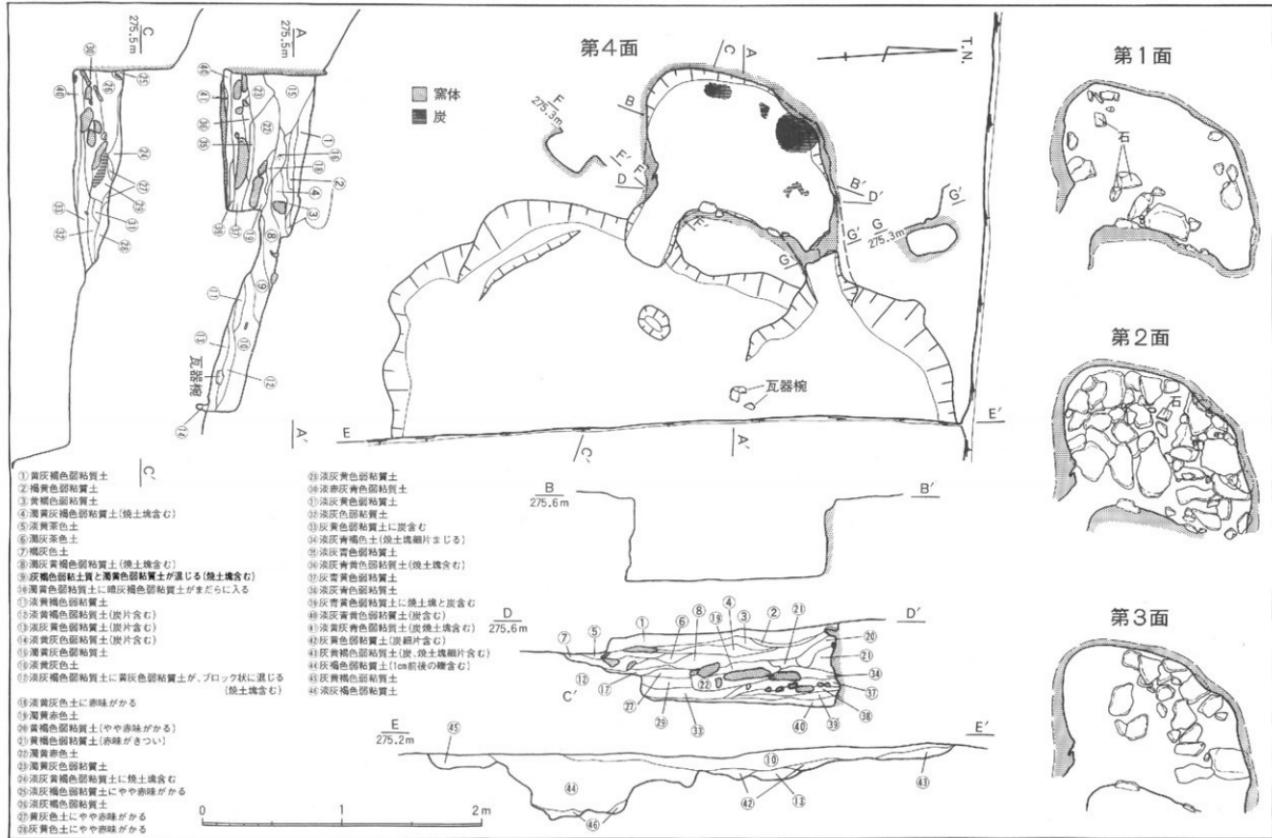


插図7 火葬墓 平面図・断面図

検出遺構	形 状	大きさ	深さ	埋 土	出 土 漢 物	地区
土壤	不 整 形	75×86	7	褐色灰黄色弱粘質土(炭細片含む)		4 C
6	横 円 形	210×110	49	褐色灰黄色弱粘質土		3 C
7	隅 丸 方 形	60×77	10	第1層 灰灰色灰 第2層 黄褐色弱粘質土		1 E
8	格 円 形	37×73	19	暗灰黃色弱粘質土(炭細片含む) 黑灰黃色弱粘質土		2 F
9	角 円 形	110×108	50	淡灰黃色弱粘質土(炭片含む)		2 F
10	隅 丸 長 方 形	200×100	53	第1層 褐黃灰黄色弱粘質土(炭片含む) 第2層 淡黃灰褐色弱粘質土 第3層 淡褐灰黄色弱粘質土		4 EF
11	角 円 形	80×49	28	淡灰黃色弱粘質土		4 E
12	横 円 形	116×72	31	黄茶色弱粘質土		4 E
13	横 円 形	48×91	16	暗黃灰黄色弱粘質土		4 E
14	方 形	58×57	20	湯灰褐色弱粘質土		4 E
15	流 滴 形	53×177	6	黄灰褐色土		4 E
16	不 整 形	85×122	23	暗灰褐色弱粘質土(炭細片含む)		4 D
17	不 整 形	95×244	33	第1層 暗赤紫色弱粘質土 第2層 澄黃紫褐色弱粘質土 明黃褐色土(燒塊少量含む) 湯灰褐色弱粘質土 湯灰黃色弱粘質土 灰紫褐色弱粘質土 黃褐色弱粘質土		2 E
18	隅 丸 長 方 形	51×184	10	湯灰褐色弱粘質土		4 G
19	隅 丸 方 形	78×111	12	第1層 黄褐色弱粘質土 第2層 黑灰色弱粘質土(炭含む)		5 FG
20	横 円 形	47×62	10	第1層 暗黃褐色弱粘質土 第2層 澄灰褐色弱粘質土(炭細片含む)		5 F
21	円 形	103×100	27	第1層 暗灰褐色弱粘質土 第2層 灰黃褐色弱粘質土		2 H
22	ト レン チ で 切 ら れ 不 明			第1層 淡黃灰褐色弱粘質土(炭細片含む) 第2層 暗灰褐色弱粘質土(炭細片、灰含む) 第3層 澄灰灰褐色弱粘質土(炭片、灰含む)		4 F
23	隅 丸 古 形	63×71	17			3 E
24	不 整 形	260×130	30	淡灰褐色弱粘質土	織文土器細片、石礫	1 E
25	不 整 形	165×100	18	褐黃色弱粘質土	織文土器細片、木炭片	1 E
ピット	横 円 形	33×27	7	暗灰褐色弱粘質土		1 F
2	隅 丸 長 方 形	33×31	8	茶黃褐色弱粘質土	上部器細片	1 E
3	円 形	38×40	4	褐灰黃色弱粘質土		4 E
4	横 円 形	59×39	16	暗灰褐色弱粘質土		4 E
5	横 円 形	38×34	15	淡褐灰黃色弱粘質土		4 E
6	横 円 形	38×52	15	淡褐灰黃色弱粘質土		4 E
7	扇 形	40×44	24	褐灰黃色弱粘質土		4 E
8	格 円 形	31×27	9	褐灰黃色弱粘質土		1 E
9	円 形	27×22	7	褐灰黃色弱粘質土		1 F
10	横 円 形	35×41	11	褐灰黃色弱粘質土(炭細片含む)		1 F
11	隅 丸 方 形	28×28	15	褐灰黃色弱粘質土		1 F
12	隅 丸 三 角 形	31×29	22	褐灰黃褐色弱粘質土		1 E

表1 検出遺構一覧

(単位: cm)



IV 出土遺物

今回の調査では、縄文時代から中世の遺物が出土している。容器類としては、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、土師質土器、瓦質土器がある。石製品としては、石鎚がある。この他、サスカイトの剝片、瓦、木炭、鉄釘、及び骨片が出土している。

以下、遺構毎に概観する。

なお、記述するにあたって、土師器の杯の分類を杯A、杯Bとした。

杯A 口縁端部が、内側へ巻き込むもの。

杯B 口縁端部が、やや尖りぎみに丸くおさまるもの。

また、石器の観察にあたっては、便宜上、左側をA面、右側をB面とした。

土壤1

土師器が、3点出土している。そのうち、杯Aが、2点出土している。

土壤24

縄文土器が1点、石鎚が2点、及び、剝片が1点出土している。

縄文土器は、細片で器形は不明である。

石鎚（挿図9-1,2） 2点とも、サスカイト製の打製石器である。

四基無茎式石鎚（1） 長さ2.25cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量1.0gを測る。先端は、欠損し、四基の形状は、えぐりこみ方が深い。両面ともに側辺から整った調整剝離が施されている。

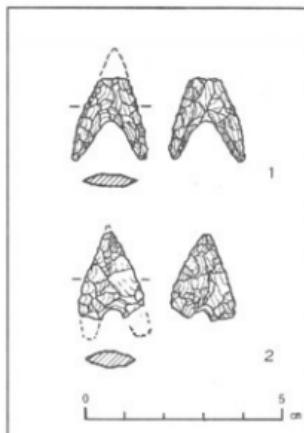
四基無茎式石鎚（2） 長さ2.2cm、幅1.35cm、厚さ0.35cm、重量1.3gを測る。先端と基部の一部を欠損している。側辺が直真にのび、基部は、V字状に凹んでいる。B面に比べると、A面の調整は粗く、右側に大きな剝離面が残っている。

土壤25

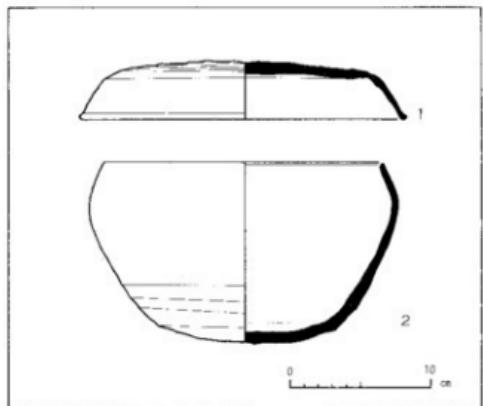
縄文土器が1点、及び木炭が出土している。

火葬墓

須恵器の藏骨器が1点、鉄釘が1点及び骨片が出土している。この藏骨器は、本来藏骨器として作られたもの



挿図9 土壌24 出土遺物



挿図10 火葬墓出土遺物

ではなく、日常生活において使用されていた皿と鉢を、蓋と本体として転用したものと思われる。

皿（挿図10-1） 口径22.7cm、器高4.15cmを測る。口縁部はわずかに内側して外上方にのび、端部付近で外反し、端部は平坦な面をなす。底部は平底である。底部外面は、丁寧な回転ヘラケズリの後、不定方向のヘラケズリを加えている。底部内面は回転ナデの後、不定方向のナデを加えている。他は、回転ナデ調整が施されている。ロ

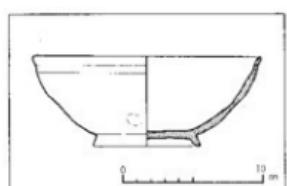
クロは右回りである。色調は内外面ともに暗青灰色を呈し、底部は灰色を呈している。胎土は粗く白色の小石を含み、焼成は堅緻である。

鉢（挿図10-2） 口径19.8cm、器高13.15cmを測る。全体に、器体は偏平な球形をしている。体部は底部より大きく内側して立ち上がり、肩部で最大径を測る。口縁部はわずかに上方にのび、端部は内傾する面をもつ。底部は丸底である。底部外面から体部下半外面にかけて回転ヘラケズリが施され、底部と体部との境には指頭圧痕が一巡している。底部内面は回転ナデの後、不定方向のナデが加えられている。他は、回転ナデ調整が施されている。ロクロは右回りである。色調は内外面ともに青灰色を呈している。胎土は粗く白色の小石を含み、焼成は堅緻である。

鉄釘 長さ4.5cm、重量1.6gを測る。頭部は片側に肥厚し、断面は長方形を呈している。

窯跡

瓦器挽が1点出土している。瓦器は、今回の調査でこの挽1点のみである。



挿図11 窯跡出土遺物

挽（挿図11） 口径16.0cm、高台径7.45cm、高台高0.6cm、器高6.4cmを測る。体部は、丸みをおびた底部からゆるやかなカーブを描いて立ち上がる深い椀形を呈している。口縁端部は丸くおさまる。高台断面はU字形を呈し、外方に踏んばっている。全体に磨滅が著しく暗文の図化は不可能であるが、内面見込みの部分には格子状の暗文が、周縁部には横方向の暗文が施され、外面部から体部下半にかけ

て斜方向の暗文が施されていたと思われる。色調は黒灰色を呈し、胎土は精良である。

ピット2

土師器が1点出土している。

地上直上

南東部地山直上からは、土師器が2点、北西部地山直上からは、土師器が17点、北部地山直上からは、石鎌が1点出土している。

北西部地山直上から出土した17点の土師器のうち、器形がはっきりするものは、10点ある。そのうち9点は杯で、他の1点は高台部である。杯は、杯A、杯Bの2つのタイプに分類することができる。

杯A（挿図12-1） 4点ある。

（挿図12-1） 口径13.4cm、器高3.15cmを測る。底部より丸みをもって外上方に開き、口縁部に至る。口縁端部は内側へ巻き込んでいる。底部は平底である。底部外面は未調整で、凹凸が激しく、内面はナデ、他はヨコナデ調整である。色調は明褐色を呈し、胎土は精良である。

杯B（挿図12-2） 5点ある。

（挿図12-2） 口径11.0cm、器高2.95cmを測る。底部から直線的に外上方にのび、口縁部に至る。口縁端部はやや尖りぎみに丸くおさまる。底部は平底である。底部外面は未調整で、凹凸が激しい。他は磨滅のため調整不明である。色調は淡黄褐色を呈し、底部内外面に煤が付着している。胎土は砂粒を含んでいる。

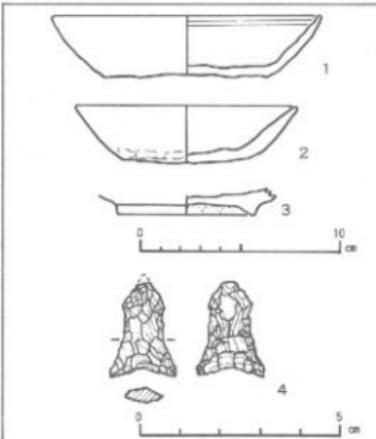
高台部（挿図12-3） 高台径6.8cm、高台高0.5cm、残存器高1.4cmを測る。高台は偏平な円形をしている。断面は三角形を呈する。高台内面には貼り付け時の指頭圧痕が顕著に残る。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒を含んでいる。

側刃がやや内側した五角形状の石鎌（挿図12-4） 長さ2.4cm、幅0.95cm、厚さ0.5cm、重量1.45gを測る。サヌカイト製の打製石器である。先端が欠損している。両面ともに調整剝離が施されている。

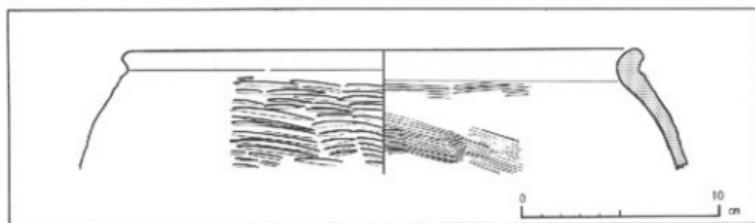
第3層

第2トレンチ南側から土師器が1点、第2トレンチ東端南擴張部から須恵器が1点、黒色土器が1点出土している。そのうち須恵器は杯、黒色土器は内黒の碗である。

杯（挿図1-2） 口径10.4cm、残存器高2.75cmを測る。底部を欠損し、体部は底部から外



挿図12 地山直上出土遺物



挿図13 第2層出土遺物

上方に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は大きく屈曲し、水平にのびる。端部は丸くおさまる。全体に回転ナデ調整が施されている。色調は灰白色を呈している。胎土は密で、焼成はあまり軟質である。

椀（挿図1-1） 口径13.5cm、残存器高4.6cmを測る。体部はやや内彎ぎみに外方にのびる。口縁部は外面を横方向に強くなだすことにより、くびれている。端部は丸くおさまる。全体に磨滅しているため調整は不明である。色調は内面黒色、外面明黄褐色を呈している。胎土は良である。

第2層

第2トレンチ西拡張部から土師器が3点、第4トレンチ付近から瓦が1点、東部から土師器が1点、北東部斜面から土師器が1点、及び瓦質土器の甕が1点出土している。そのうち、第2トレンチ西拡張部から出土した土師器には、高台付き杯が1点、杯が1点ある。また、第4トレンチ付近から出土した瓦は、硬質の平瓦で暗青灰色を呈している。

甕（挿図13） 口径25.4cm、残存器高6.3cmを測る。体部は球状に張る。口縁部はしだいに肥厚し、端部は玉縁状になる。体部外面は浅い平行タタキ目、内面は細かく丁寧な刷毛目、口縁部はヨコナデ調整が施されている。色調は外面黄灰色を呈し、内面灰色を呈している。胎土は砂粒を含んでいる。

第1層

第1トレンチから須恵器が1点、第2トレンチから須恵器の甕が1点出土している。

甕（挿図1-3） 残存器高6.6cmを測る。肩部から頸部のみ残っている。肩部から頸部はくの字に屈曲し、屈曲部分に補強のため粘土が貼りたされている。肩部内面に円弧タタキ目文が施され、他は回転ナデ調整が施されている。色調は内外面ともに暗灰色を呈している。胎土は、やや密で、焼成は良好で堅緻である。

表採

第3トレンチ北半部から土師質土器が1点、東斜面から土師器が1点出土している。

小結

ここでは、火葬墓出土の藏骨器と、窯跡出土の瓦器椀の年代について考察を加えることにしたい。

今回火葬墓から出土した藏骨器は、先にも述べたように皿と鉢を藏骨器として使用。器形^(注1)は、奈良時代に生産されたものと考えられるが、この藏骨器が、生産されすぐに埋葬されたとは必ずしも言えないことや、昭和初年に発見された龍泉古墓出土の藏骨器と同時期に属するものと考えられることから、この藏骨器は、奈良時代後期から平安時代前期におさまるものと考えられる。

瓦器椀については、深い半球状の椀形をしていること、高台がしっかりと外方に踏んばっていること、かすかに内面見込みの部分には格子状の暗文、周縁部には横方向の暗文、外面には^(注2)体部下半に斜方向の暗文を止めていることから、尾上実氏の編年でいわれるⅠ—3期からⅡ—1期（平安時代後期）の古い時期の様相を呈するものと考えられる。

(注1) 中村浩「陶邑Ⅰ」大阪府教育委員会(1976年)

中村浩「陶邑Ⅱ」大阪府教育委員会(1977年)

中村浩「陶邑Ⅲ」大阪府教育委員会(1978年)

(注2) 中村浩「大阪府富田林市龍泉出土の藏骨器について」(『考古学雑誌』第55巻 第3号、1970年)

(注3) 尾上実「南河内の瓦器椀」(『藤沢一夫先生古稀記念古文論集』1983年)

V ま と め

今回の発掘調査の意義は、大規模調査によって当該地周辺の考古学的環境を知り得る資料を提供したことであろう。以下、概往の調査を踏まえて、調査結果をまとめてみる。

1. 調査地は、標高280mを測る嶽山山頂にあって、縄文時代の遺物が出土している点で興味深い。土壠24からは土器片1点と石鏃2点及び剣片1点が出土しており、調査区北端部の地山直上でも石鏃1点が出土している。嶽山の西方には錦織・錦織南の両遺跡が、東方には佐備川遺跡が距離を近くして位置し、当該地一帯が生活圏であったことを立証するものである。

2. 調査区東斜面に藏骨器を作った火葬墓が検出された。出土地南方約400mの南斜面でも藏骨器の出土が報告されており、調査地一帯が墓域として位置付けられる。調査区西方の石川を見下ろす斜面には、古墳時代後期の群集墳である嶽山古墳群があって、伴侶体制の整備とともに葬制の変遷が認められる。今回の調査で、特に、埋下上層中に炭及び灰を伴う土壠が多く、土壠1では、平安時代初頭の上層器の杯が炭や灰に混じって出土しており、遺構北側の地山直上でも隣接して一括出土していることと考え合わせると、墓としての性格を有する遺構と推測される。各土壠とも底面に焼けた痕跡をとどめない点も特徴である。

3. 火葬墓から出土した藏骨器は、納骨容器として須恵器の鉢を、蓋には同質の皿が使用されていた。鉢の底部外面には円形に指頭压痕が認められ、高台の取り付けを想定した根跡^(注1)と思われる。上述の龍泉古墳から出土した藏骨器も須恵器であるが、容器に有蓋短頸壺が使用されている点、また、須恵器をもって藏骨器を覆う丁寧な葬法が成されている点で相違が認められ、被葬者間に身分的な差が存在したことがうかがえる。龍泉古墳と同じく平安時代前期ごろに納骨容器として使用されたと考えられ、被葬者は龍泉寺との関係があつたと考えられる。^(注2)

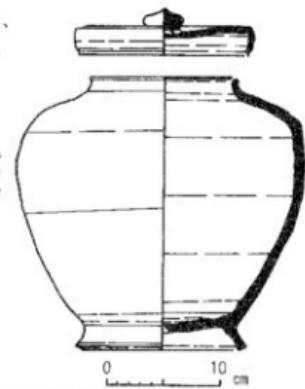
4. 大葬墓の南側の斜面で窓跡を1基確認した。調査区南西方での調査では3基の窓跡が検出されており、窓業生産遺構が嶽山山頂に存在することが明らかとなった。今回検出した窓跡の焚口付近に堆積する土中に若干の炭片が含まれるもの、炭及び灰が顕著に認められる灰原と断定できるものが認められないこと、周辺に炭及び灰を埋土中に含む土壠が多く存在すること、また、焚口付近の堆積土中から瓦器碗が1点出土しているものの、出土状況等から判断して、窓に伴う遺物とは断定しがたいことから、大葬場と墓地との関係を推測するのは不可能なことであろうか。

(注1) 中村浩「大阪府富田林市竜泉出土の藏骨器について」
『考古学雑誌』第55巻第3号、1970年

(注2) 富田林市教育委員会「富田林市の埋蔵文化財」(1978年)

(注3) 昭和58年7月から昭和59年4月に実施した嶽山第2配水場築造工事に伴う発掘調査である。(I図)

(注4) 久保常晴「古代の火葬場と墓地」(『新版仏教考古学講義』第7章墳墓、1984年)



龍泉(硯石)出土の藏骨器
(『考古学雑誌』第55巻 第3号より引用)

付 獨山山頂遺跡の考古地磁気法による年代推定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫、岡田 宗

はじめに

土の中に含まれている鉄の酸化物、謂ゆる“砂鉄”は、磁石になる性質を持っている。この様な性質を磁性といい、その物質を磁性体という。全ての磁性体は、加熱していくと、ある温度に達すると急に磁石でなくなる。この温度をキューリー点という。

磁性体の中には色々な鉱物があり、それぞれ異なるキューリー点を持つ。土に含まれる磁鐵鉱 (Fe_3O_4) は、575°C、赤鉄鉱 (Fe_2O_3 、ベンガラ) は、670°Cのキューリー点を持っている。これ以上の高温になると、磁性を失う。逆に、キューリー点以上の温度から冷却していくと、キューリー点を通過した瞬間から磁性体となり、磁化を持つようになる。その時に、磁場が作用していると、その磁場の方向の磁化を獲得する。この様な磁化を熱残留磁化という。

遺跡に残されている灰跡や窯跡などは、火を燃やした後、地磁気の中で冷えるので、その時の地磁気の方向の熱残留磁化を持つ様になる。地磁気の方向は、永い間に少しづつ変化している。これを地磁気永年変化といい、角度にして、1世紀で数度程度の変化である。したがって、時代が異なると当然地磁気の方向も異なり、それぞれの時代に焼かれた土も異なる方向の熱残留磁化を持つことになる。この様に、焼土遺構の残留磁気測定を行って、考古学が扱う過去の時代の地磁気の変動についての研究を、考古地磁気学という。

西南日本各地の遺跡の焼土の考古地磁気測定から、過去2,000年間の地磁気永年変化が明らかになっている (Hirooka, 1971, 広岡, 1977) ので、それと照合することによって、考古地磁気学的に年代を推定することが可能となっている。地磁気は、大略北を向いているとともに、北半球では、水平ではなく下に傾むいている。磁気コンパスの磁針の指す北（磁北）と地理学上の北（真北）の差を偏角 (Declination) といい、水平からの傾きの角度を状角 (Inclination) という。地磁気の方向は偏角と伏角で表わされる。

焼土試料の採集と測定

獨山山頂遺跡では、考古地磁気測定用の焼土試料は、Ⅱ区窯跡から16個(試料番号UOS 1～16)、Ⅰ区1号窯跡から15個 (UOS 21～35) の計31個を採集した。試料の残留磁化の方向を知

るためには、遺構中でその焼土の試料部分がどのような向きにおかれていたかのはっきりした定方位試料でなければならない。そのために、くずれない様に石膏で固めるときに、石膏の表面に平面を作り、その面の傾斜角と最大傾斜線の方位をクリノメーターを用いて測っておく。野帳にそれらの角度を記録して、試料表面には水平と最大傾斜の方向を示すマークと試料番号を記入してから遺構から切りはなす。このような手順を経て31個の試料を採集した。遺跡より持ち帰った試料はダイヤモンドカッターで34mm×34mm×34mmの立方体に整形した後、高感度に調整した無定位磁力計で測定する。方位を測った平面に垂直、あるいは平行で、たがいに直交する3軸のまわりに45°ずつ回転し、それぞれの軸に垂直な平面内の磁化成分の方向と強さを求める。この3平面内の磁化成分から3次元の磁化方向と強さを計算し、試料が遺構中にあつた時の向きに置いたときの残留磁化方向を求める。

良く焼けた試料の残留磁化強度は、焼けの悪いものに比べて大きく測定しやすいが、それでも試料の磁化は地球磁場の強さの100分の1から1万分の1しかない。したがって非常に高感度の磁力計でなければ測定は難しく、地球磁場の乱れが測定に大きく影響する。そのために入工的な磁気擾乱の少ない深夜（午前1時～3時）に測定しなければならないことが多い。

試料の遺構中での方位は、クリノメーターの磁針を用いて決めているので、磁北を基準にしたものとなっている。したがって、遺跡現場における磁北と真北のずれ（現在の偏角）の分だけ測定結果の偏角もずれている。これを真北を基準にした値になおすのに、現在の偏角7°03'を用いてある。

測定結果

II区窯跡から得た試料16個の磁北測定の結果は第1表に、I区1号窯跡の結果は第2表に示してある。表には、各試料の偏角、伏角とともに、磁化強度があげてある。偏角は東偏を正、西偏を負にとっている。磁化強度は、温度が上がり充分な熱残留磁化が獲得されているか否かの判定に有効な示標である。

充分高温にまで上がった須恵器や陶磁器の窯の場合のように1,000°Cを越える高温になっていれば $10^{-3} \sim 10^{-4}$ emu/grの値をとる。しかし、窯や炉内の場所によって、そんなに高温度には上がらない部分のあることが多く、そこでは磁化強度も弱くなる。したがって熱残留磁化がしっかりと獲得され、考古地磁気データとして認められるか否かを判定するのに磁化強度を見ると良いのである。

II区窯跡の試料2個（UOS2, 10）は磁化方向が同遺構の他の試料と異なる。特にUOS2は地磁気の方向とは考えられないかけはなれた磁化を示しており、これは、焼土のその部分が磁

化獲得後に何らかの原因で動いたためと思われる。

I区1号窯跡の試料はすべて強い磁化をもち、磁化方向のまとまりもよい。

各遺構毎の測定結果から平均磁化方向を求めこれを考古地磁気データとして、年代推定に供する。第3表には、各遺構の平均偏角と平均伏角が示されている。II区窯跡では、磁化方向が他と異なっていた2個の試料を除いて平均磁化方向の統計計算を行った。また、個々の試料の磁化方向のばらつきの程度を表わす値も同表には入っている。フィッシャーの統計法 (Fisher, 1953) による95%レベルの信頼角 (α_{95}) と精度パラメータ (K) である。 α_{95} は誤差の大きさと考えれば良く、この値は小さい程まとまりがよく信頼度の高いことを意味している。須恵器など高温で焼成された古窯の場合は1~3°の値をとる。Kは、その遺構で平均的な2個の試料を選び、磁化方向をそろえる成分が乱そうとする成分の何倍であるかを表す値で、大きな値をとる程、精度が高いことを意味する。一般的によく焼かれた古窯では200以上、非常にまとまりのよい場合には1,000を越える値をとる。今回のI区1号窯跡では500を越えているので、まとまりが相当良いこともこれで分かる。

考古地磁気推定年代

西南日本の考古地磁気年変化曲線(広岡, 1977)に、第3表の考古地磁気データをプロットしたのが第1図である。西暦の100年毎の

試料番号	偏角 (*E)	伏角 (*)	磁化強度 (e.m.u./gr)
U O S 1	-4.7	48.7	3.88×10^{-5}
	2	135.2	2.19×10^{-5}
	3	-2.1	2.53×10^{-5}
	4	1.3	1.09×10^{-4}
	5	3.0	2.10×10^{-4}
	6	9.9	6.72×10^{-5}
	7	-8.8	4.58×10^{-5}
	8	-6.4	7.57×10^{-5}
	9	6.9	1.02×10^{-3}
	10	-24.1	6.66×10^{-4}
	11	1.5	1.67×10^{-3}
	12	1.8	1.10×10^{-3}
	13	1.8	1.63×10^{-3}
	14	-1.2	1.03×10^{-3}
	15	2.2	1.07×10^{-3}
	16	-7.7	5.21×10^{-4}

(※は統計計算の際に除外したもの)

表2 II区窯跡の磁化測定結果

試料番号	偏角 (*E)	伏角 (*)	磁化強度 (e.m.u./gr)
U O S 21	-24.2	60.4	1.38×10^{-3}
	22	-23.5	1.07×10^{-3}
	23	-23.2	1.20×10^{-3}
	24	-19.8	1.43×10^{-3}
	25	-15.2	1.16×10^{-3}
	26	-24.1	1.12×10^{-3}
	27	-24.6	1.16×10^{-3}
	28	-21.1	1.35×10^{-3}
	29	-24.1	1.08×10^{-3}
	30	-22.5	9.62×10^{-4}
	31	-13.9	1.01×10^{-3}
	32	-20.9	1.37×10^{-3}
	33	-17.7	1.09×10^{-3}
	34	-20.6	8.53×10^{-4}
	35	-15.6	1.56×10^{-3}

表3 I区1号窯跡の磁化測定結果

地球磁場方向が二重丸で、50年毎が白丸で示されている。2つの黒丸が今回の測定結果の平均磁化方向で、それらを囲む円が α_{95} の範囲を示している。黒丸に最も近い永年変化曲線の部分の年代が考古地磁気年代となる。これによると考古地磁気年代は、I区1号窯跡が

遺構名	平均偏角 (°E)	平均伏角 (°)	α_{95} (°)	K
I区1号窯跡	-20.79	59.38	1.60	569.0
II区窯跡	-0.21	56.04	2.17	336.2

A. D. 630±20年

となり、II区窯跡は

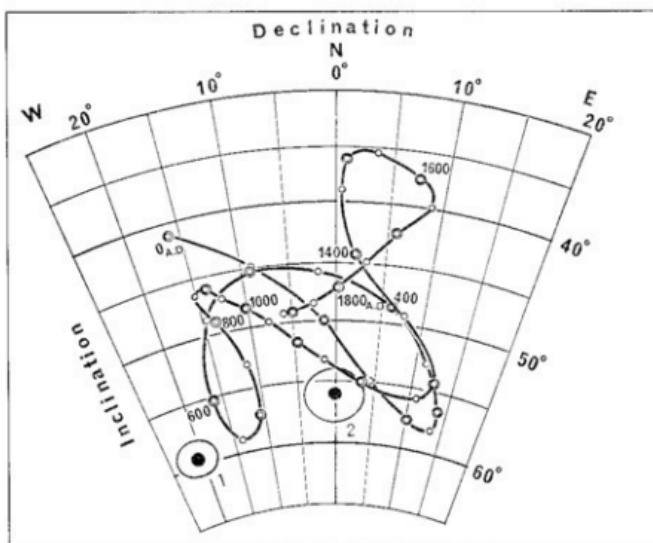
A. D. 1,180±30年

となる。

α_{95} : フィッシャーの信頼角

K : フィッシャーの精度パラメーター

表4 猿山山頂遺跡の考古地磁気測定結果



插図14
過去2000年間の西南日本における地磁気永年変化（広岡、1977）と、猿山山頂遺跡の考古地磁気測定結果

1: I区1号窯跡
2: II区窯跡

引用文献

- Fisher, R. (1953) Dispersion on a sphere, Royal Astronomical Society of London, vol. 217, A, 295-305.
- Hirooka, K. (1971) Archaemagnetic Study for the past 2,000 years in southwest Japan, Memoirs of the Faculty of Science, Kyoto University, Series of Geology & Mineralogy, vol. 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀考古地磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, 15巻, 200-203.

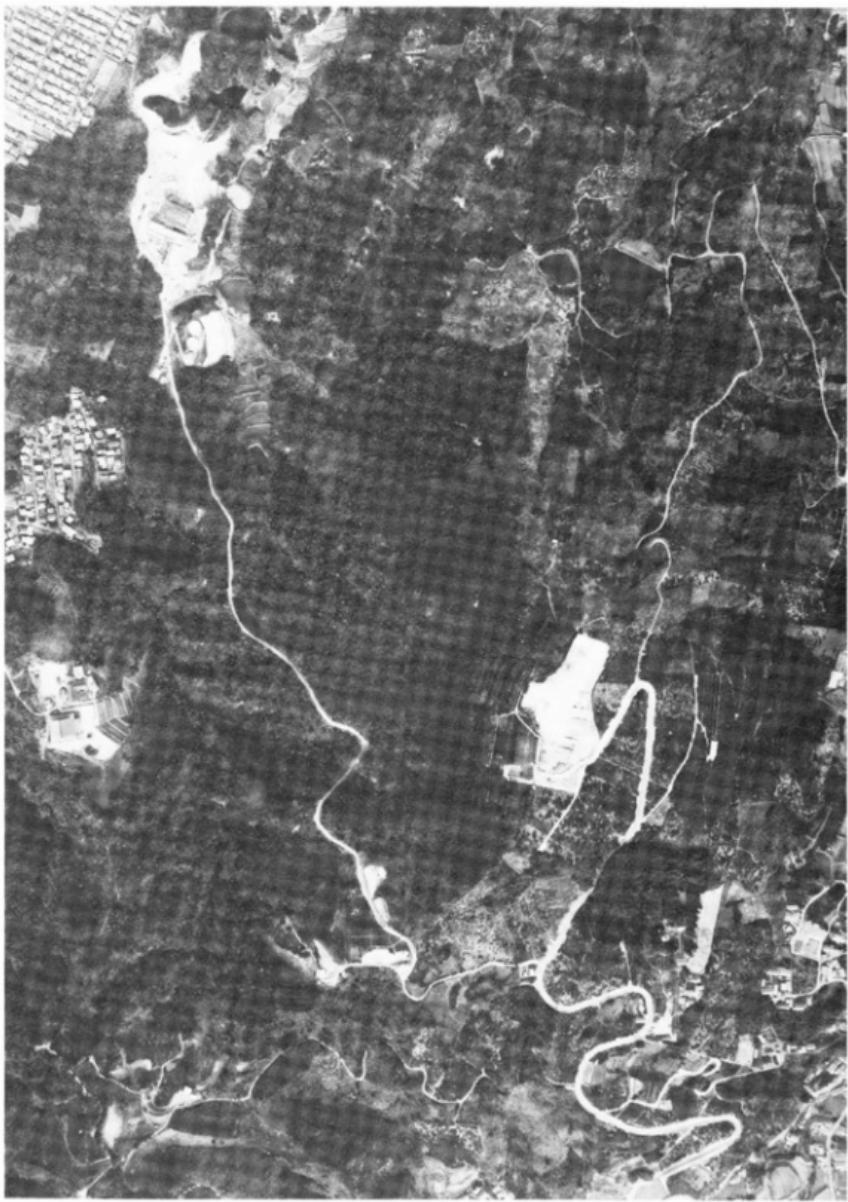
図 版



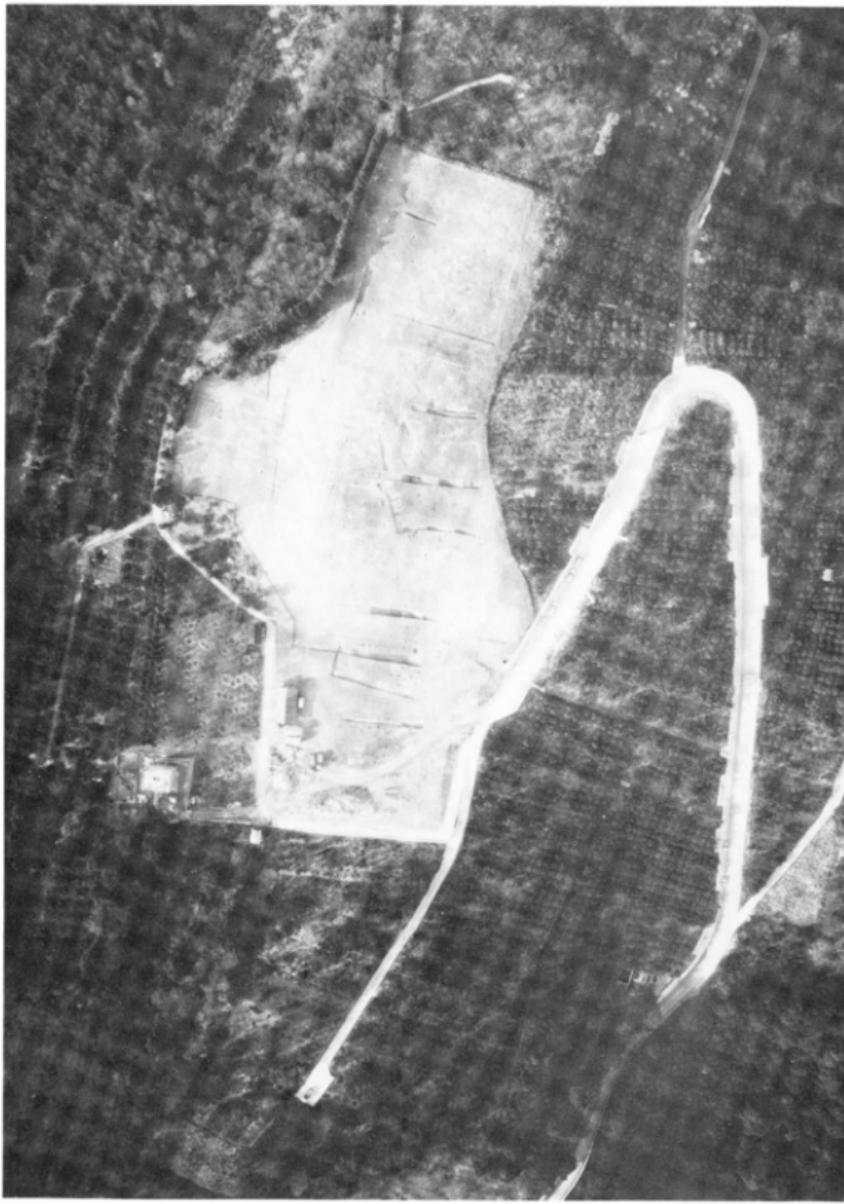
調査区遠景航空写真 南から



調査区遠景航空写真 西から



巣山周辺航空写真



調査区全景航空写真



調査区近景 南から



調査区北半部近景 南から



調査区 西半部近景 東から



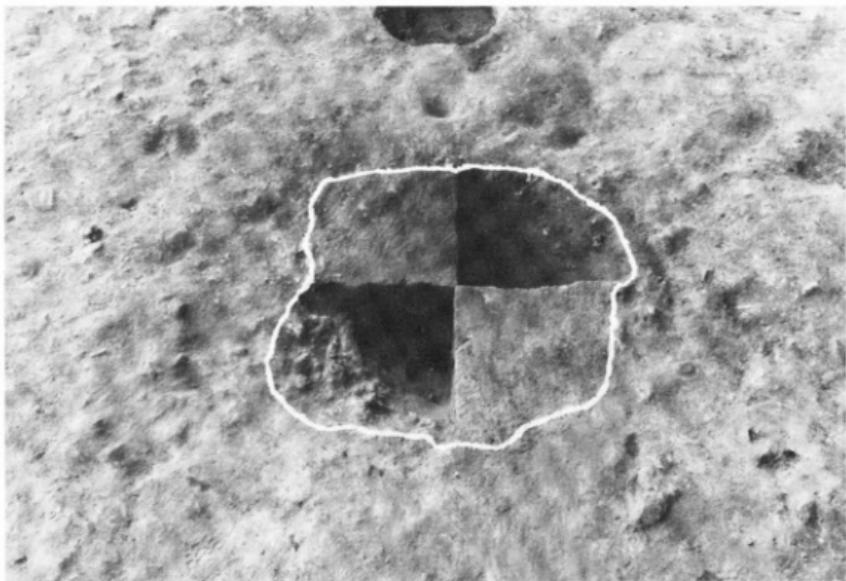
調査区 東半部近景 北西から



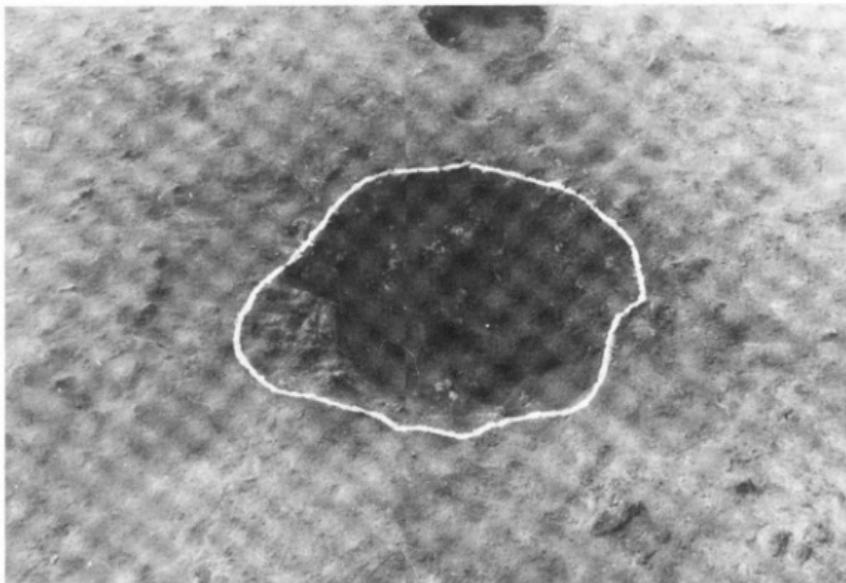
調査区南半部近景 北から



調査区からの赤阪城跡遠景



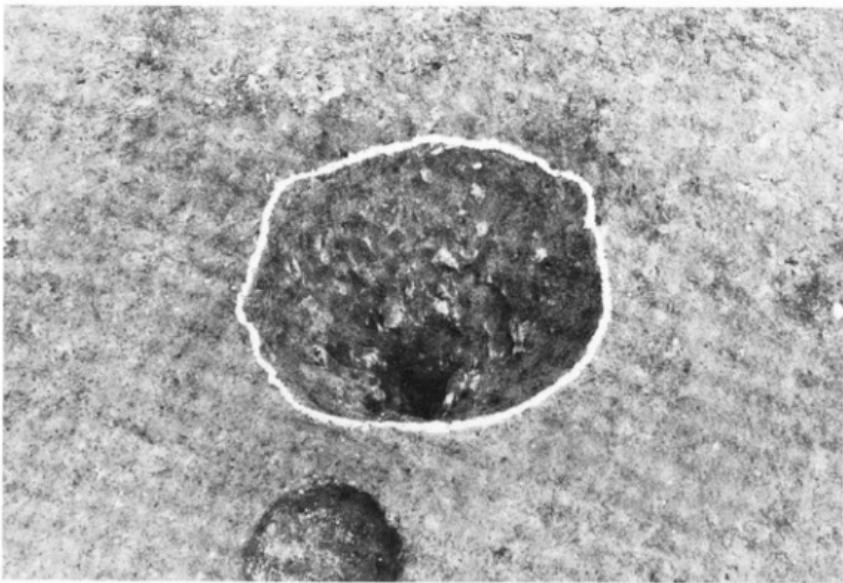
土壤1 半掘状況 北から



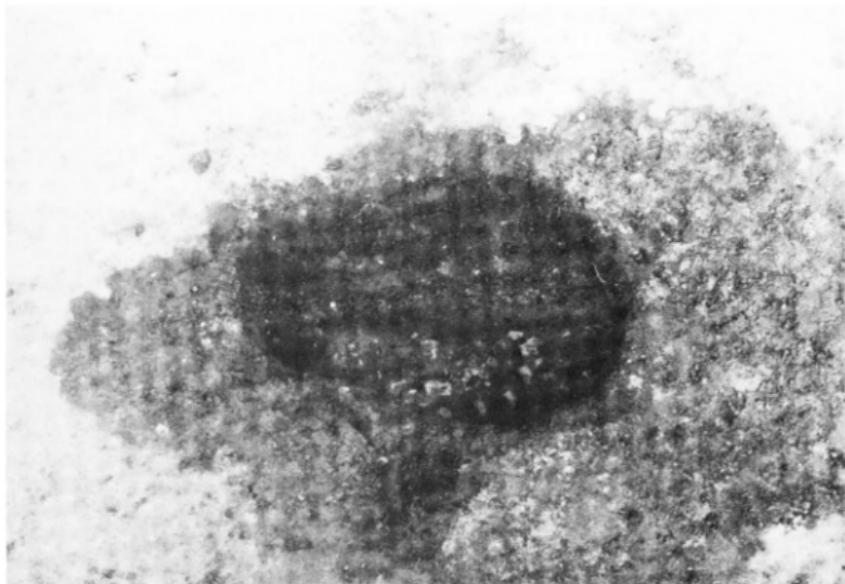
土壤1 完掘状況 北から



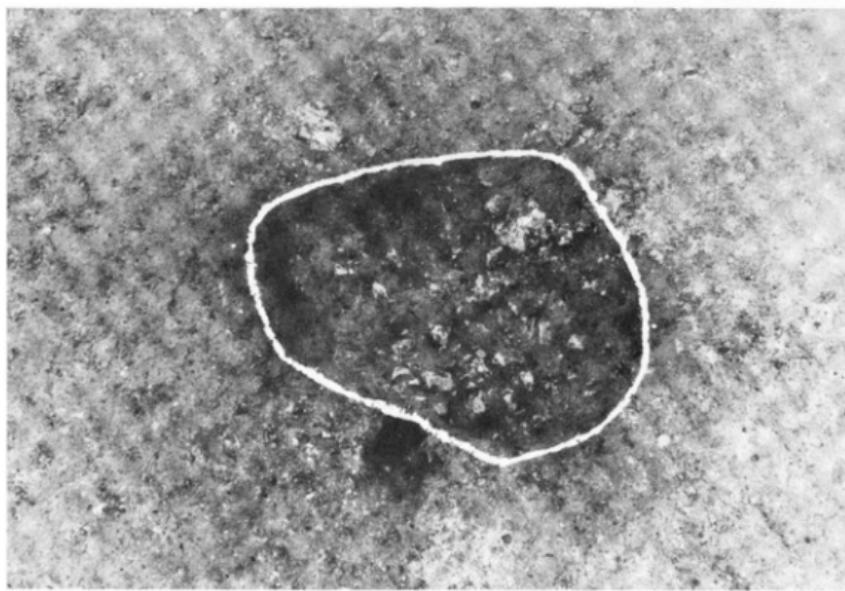
土壤2 半掘状況 南から



土壤2 完掘状況 南から



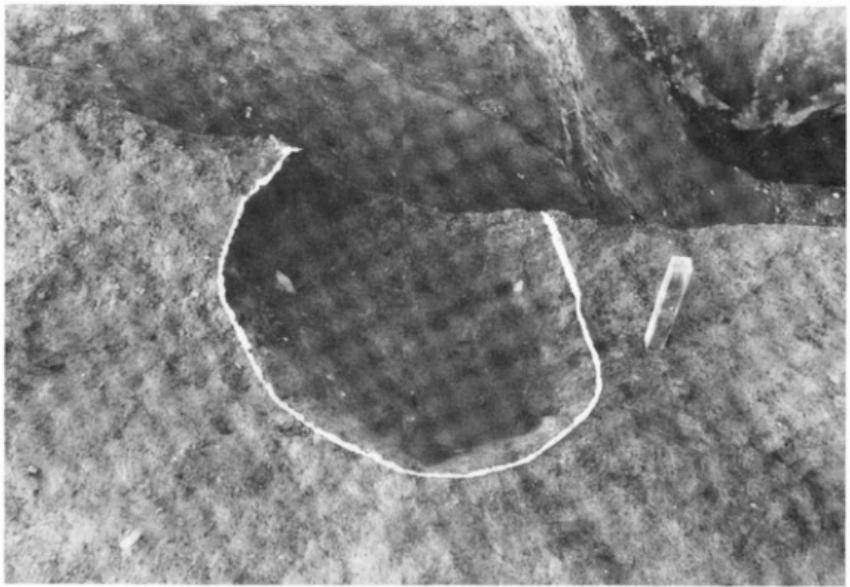
土壤 3 半堀状況 南から



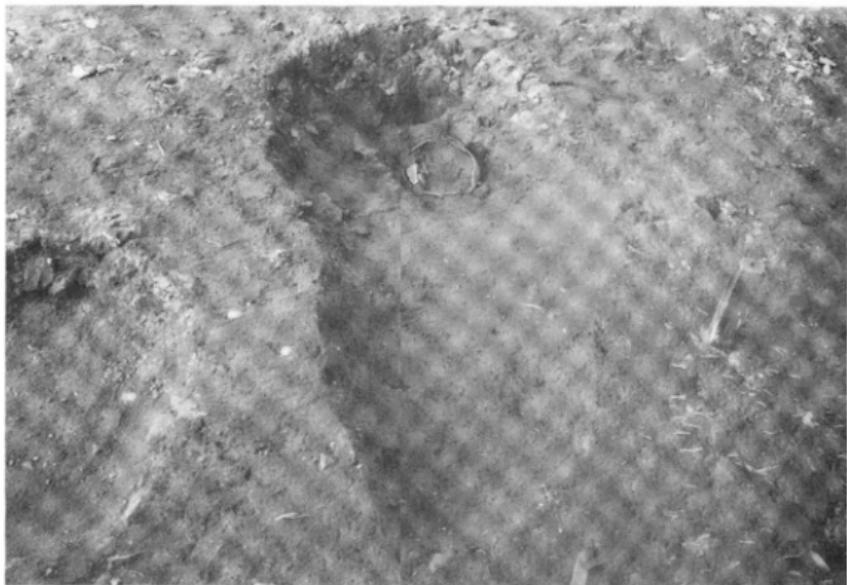
土壤 3 完堀状況 南から



土壤4 半堀状況 南から



土壤4 完堀状況 南から



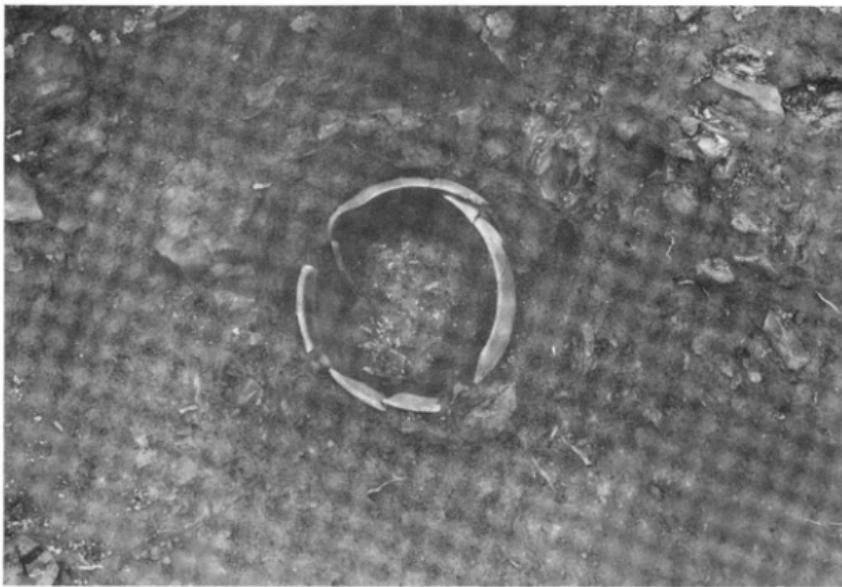
火葬墓内蔵骨器出土状況(検出時) 南から



同上



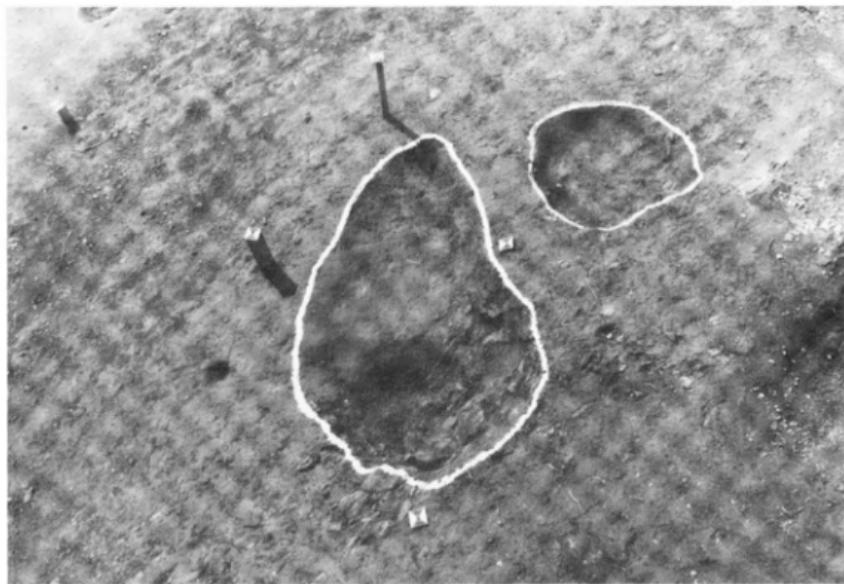
火葬墓内藏骨器出土状況(精査後) 南から



火葬墓藏骨器内骨片出土状況 南から



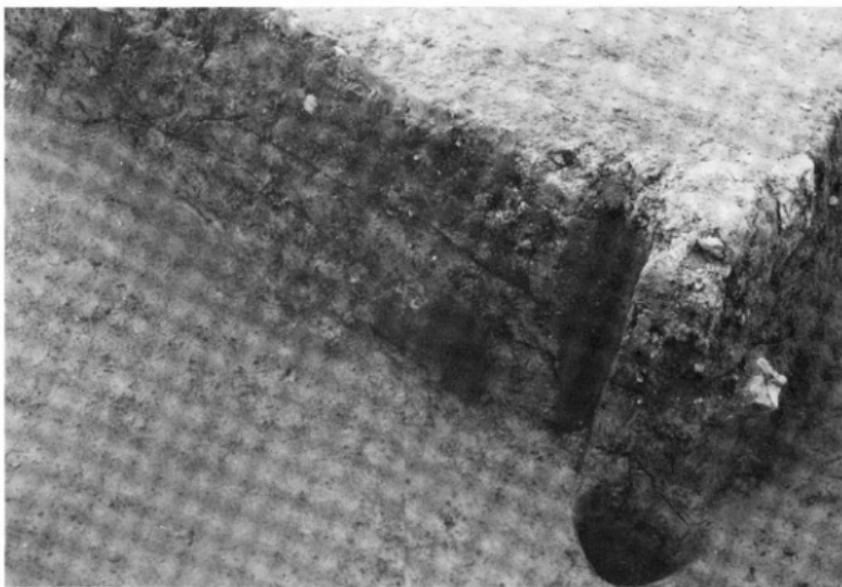
火葬墓蔵骨器内埋土除去後 北から



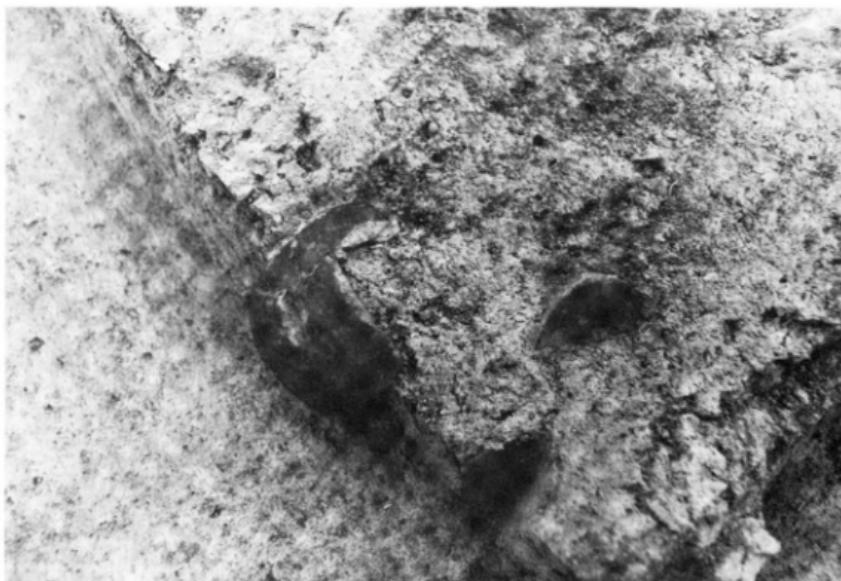
火葬墓全景 北から



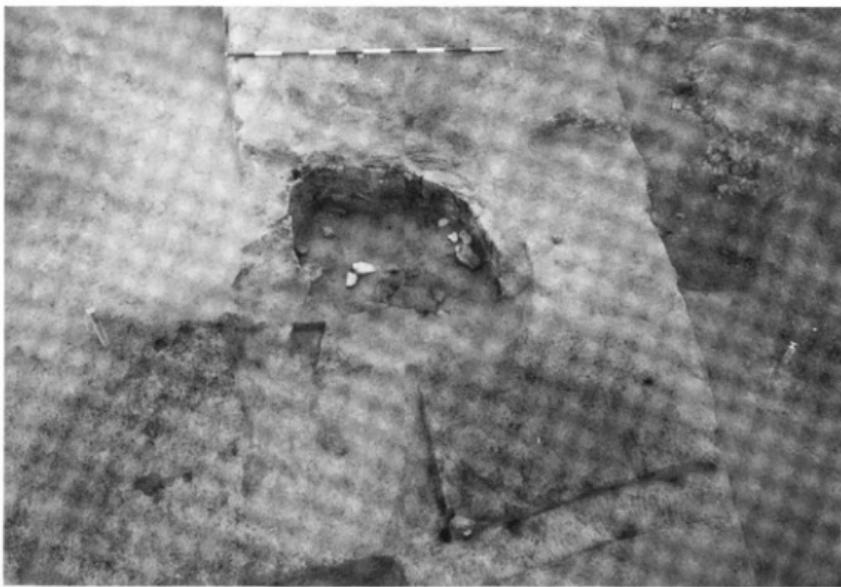
窯跡検出状況 南東から



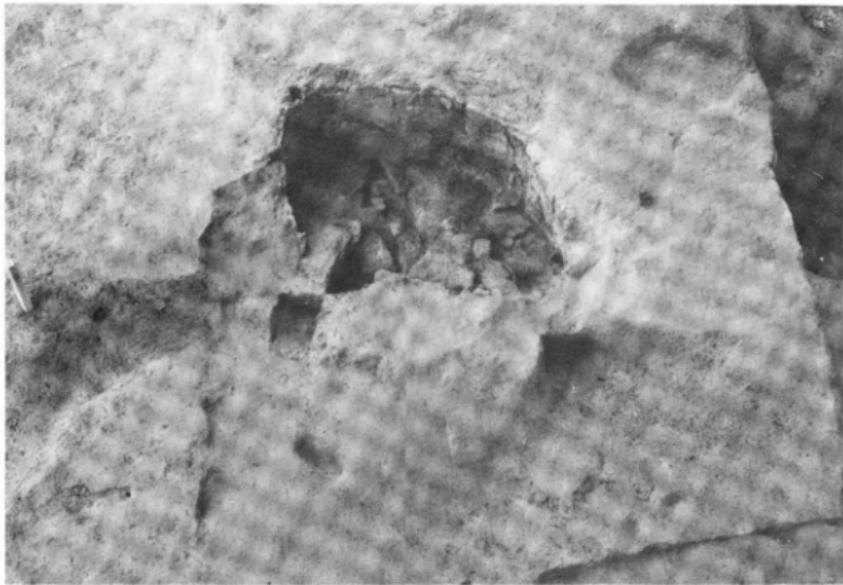
窯跡前庭部瓦器検出状況 南東から



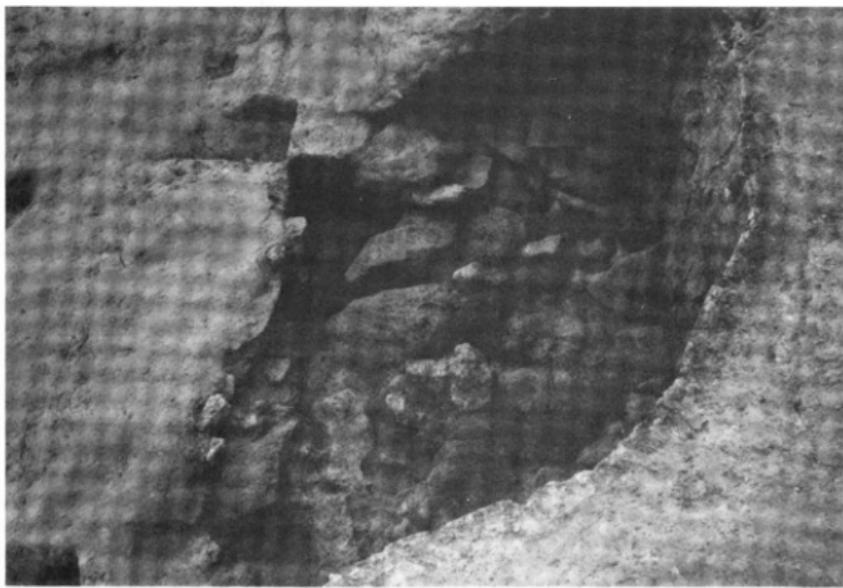
窯跡前部瓦器椀出土状況 南東から



窯跡全景(半掘時) 東から



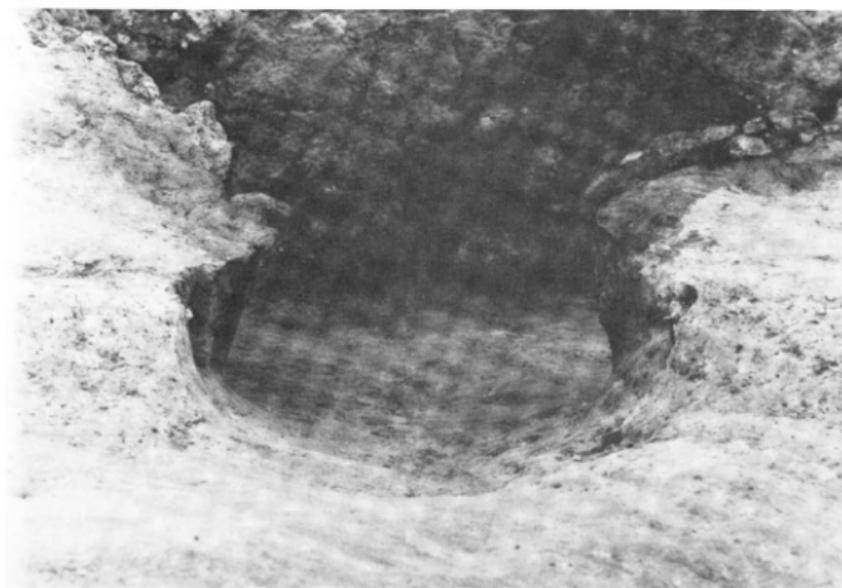
窯跡全景(窯体片検出時) 東から



窯跡内窯体片出土状況 北から



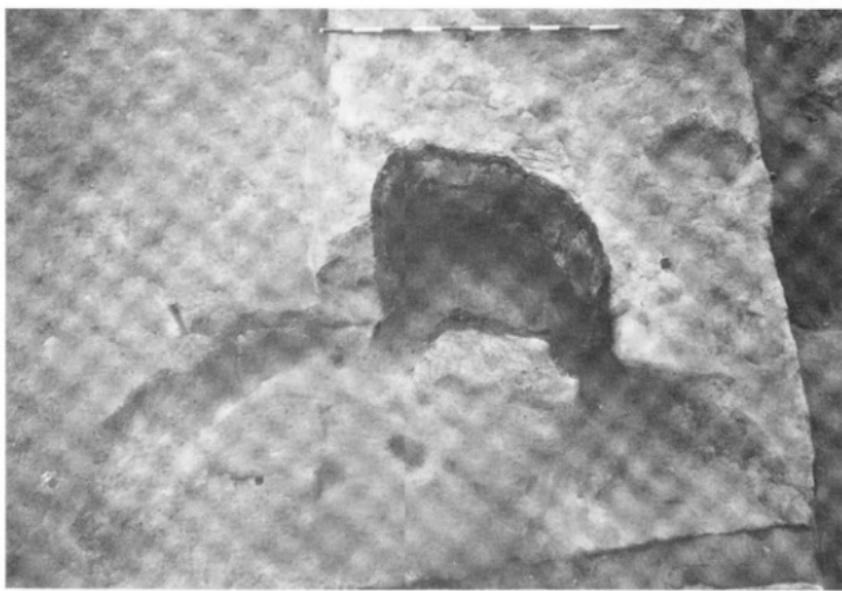
窯跡焚口 東から



窯跡横口 東から



窯跡全景(完掘時) 西から



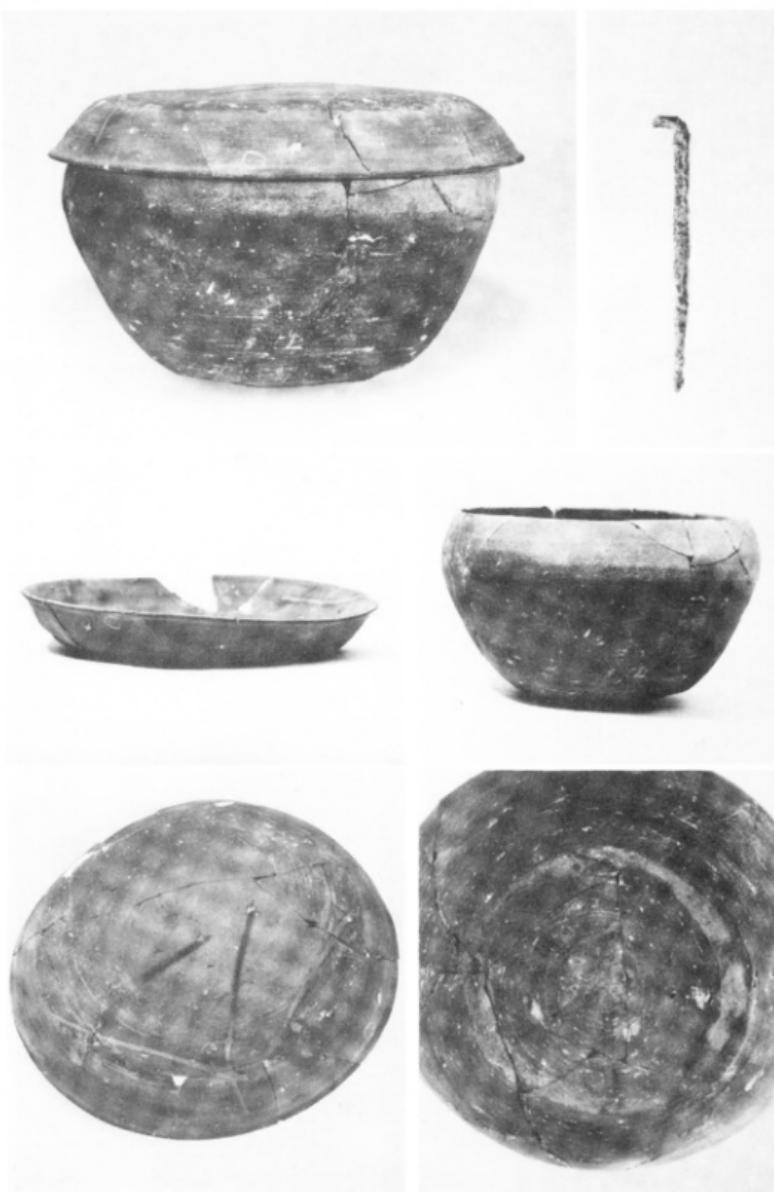
窯跡全景(完掘時) 東から



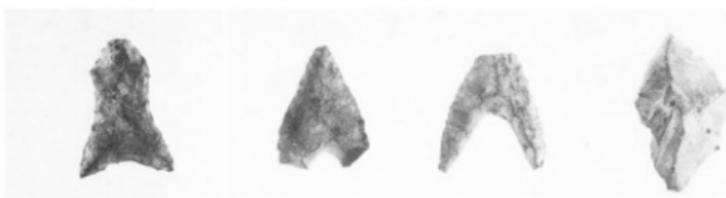
土壤24 石鏃出土状況 北から



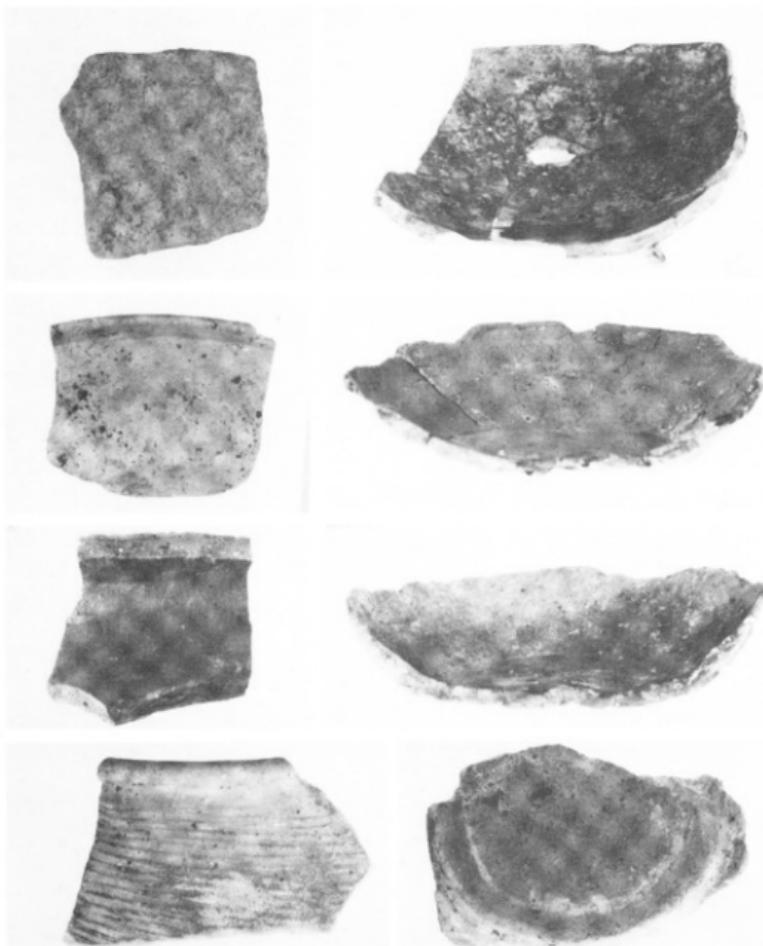
地山直上石鏃出土状況 南から



火葬墓出土鐵器・鐵釘



土壤24 出土石器、剝片・地山直上出土石器



第3層出土黑色土器、須恵器・第1層出土須恵器・第2層出土瓦質土器
・窯跡出土瓦器・地山直上出土土師器

富田林市埋蔵文化財調査報告11

発行年月日 1985年2月25日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 汐の宮綜合印刷

1985. 500

嶽山山頂遺跡発掘調査平面図

1 2 3 4 5 6

凡例

- 道 構
- 主 曲 線
- 計 曲 線
- メッシュ点



A

B

C

D

E

F

G

H

I





